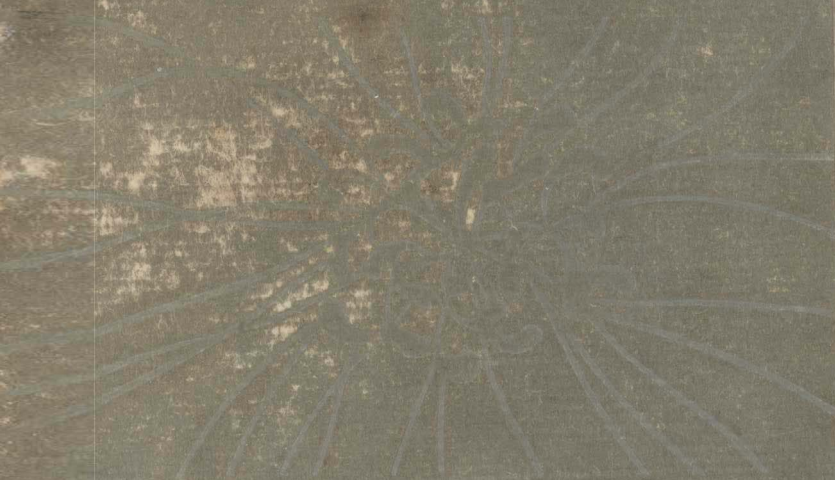
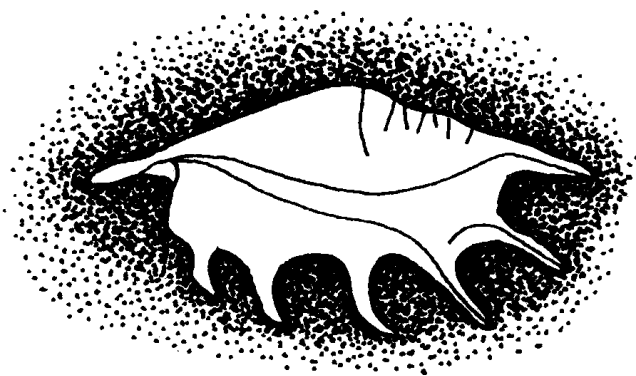


笨の花粉



朱の花粉

舟橋聖一



朱 の 花 粉

講 談 社

昭和 33 年 12 月 25 日 第 1 刷 発 行 ©

著 者 ふな はし せい いち
舟 橋 聖 一

¥ 290

東京 都 文 京 区 音 羽 町 3-19
発 行 者 野 間 省 一

東京 都 文 京 区 関 口 町 140
印 刷 所 慶 昌 堂 印 刷 株 式 有 限 公 司

発 行 所 東京 都 文 京 区 音 羽 町 3-19 株 式 有 限 公 司 大 日 本 雄 弁 会 講 談 社
振 替 東 京 (3930)

落 丁 本 ・ 乱 丁 本 は お 取 り か え い た し ま す 。 (黒 柳 製 本)

目 次

女の予感	ある烙印	蛇 <small>ヒョウ</small> 石 <small>いし</small> 峠	血の愛	当分休診	白樺林道	冒瀆	浅間の火	松原湖	二丁池
.....
133	119	105	91	77	64	49	34	19	7

征服被征服	147
稲光り	161
女スパイ	189
秋蟬	203
屋根伝い	233
春の朝霧	245
輾転反側	258
花曇り	286
ミステーク	316
最後の手紙	329

装
幀
斎
藤
清

朱
の
花
粉

二 丁 池

I

裏木戸を出て、半丁ほど行くと、沼とも沢ともつかぬ卵形の水たまりがあつた。まわりが、およそ二丁ほどあるので、二丁池とも、卵池とも云つた。雨が降るとすぐ濁つて、泥々どろどろになるかと思えば、天気の良い朝などは、滅法美しく透き通つて、池の底に青空をうつしていることもある。

今から、二十年ちかく昔のことだ。

当時ハイ・ティーンハイティーンの菊繪は、学校の往き還りに、この池のほとりを歩き、そうかと思えば、暗くなるまで、ボートを漕いだこともある——。千種ちくまや三奈子ともよく遊んだ。

三人は聖華女学院の劇研究会のメンバーだつた。それで、池のほとりの掛椅子ベンチに腰かけて、台詞セリの読合せをしたり、対話の練習をしたりした。

主として、どんな脚本を選んだかと云うと、その頃のことだから、ヴィルドラックの「商船テナンティ」とか、ルノルマンの「落伍者の群れ」とか、岸田国士の「紙風船」とかであつた。

もつとも、劇研究会の中には、もつと左翼的な台本を選べと主張する者もいないではなかつた。

たとえば、シンクレアの戯曲とか、久保栄や久板栄二郎の書いた作品のようなものだ。然し、学校当局は、劇研究会の存在自体に、すでにひどく神経質だったので、左翼演劇などの許される筈はなかつた。

フランスものなら、まアまアというところであつた。

だから菊繪のように、思想的には無色の中立派でも、学校当局からは、まるで左翼学生と同じように、睨まれてしまう立場のものもあつた。

一級上の千種が、教員室へ呼ばれて帰つてきたとき、

「安原先生ときたら、劇研はみんな赤だらうつて云うの。無茶ね。朱に交われれば赤くなるだからつて……」

「まア驚いた。朱つて誰のこと」

「知らない」

「とにかく、閉鎖を命じられるまで、頑張りましようよ」

と、菊繪は云つた。

劇研究会の部長は、武中先生といつた。日本文学を教えていた。歌舞伎や文楽のことにも明るかつた。

当時としては、自由なものと考え方をするので、学生間には人気があつた。木々の梢に青い新

芽の出る頃、武中先生を二丁池へ招待したことがあつた。

先生はボートの漕ぎ方も知らなかつた。

「僕は学生時代に、本ばかり読んでいたんでね……ボートを漕いだり、自転車に乗つたりする稽古をしなかつたんだ」

「まア、自転車もダメなんですか」

「いや、最近、練習しようと思つている。非常時に備えてね……」

「先生、教えて上げるわ」

と、三奈子が云つた。

「とにかく、この池の景色はいい」

武中先生はボートの舷側につかまつたまま、左右を見廻した。

「すてきでしょう。私たちは、いつもここで、台詞の勉強したり、読合せしたりするんですよ」

「まつたく、ルノルマンの芝居にでも出てきそうな背景だ」

「先生に認めて戴いて、私たちも鼻が高いわねえ」

殊に、この池に近く住む菊繪は、何んだか自分がほめられているような気がして、ドキドキした。

もつとも、表通りに面した南側の玄関、待合室、治療室、技工室などは、則光の代に、新しく普請をした。然し、その横に並ぶ準備室、消毒室、薬局などは古いままで、家族の住む西側の母屋も、祖父の建てたものだつた。

兄の音雄は、歯医者はいやだと云つて、東大の法科に通つていた。それで二階に、階段をはさんで、兄妹の部屋が四畳半。その下が茶の間。それにつづく両親の居間からは僅かながら、竹を植えた京風の庭を見ることが出来る。

父と音雄とは、実の父子おとこでありながら、折合いが悪かつたようだ。いつ頃からそうなつたものか、菊繪は知らない。

彼女が物心つき、日記に自分の感想を書きしるすようになってからというものは、兄と父との衝突や口評くちあはせいに、小さい胸を痛めることが、よくあつた。

父は、町会長などもやつていたので、保守反動の典型で、二言目には、国体明徴だの、八紘一宇だのが飛出した。兄はそのたびに顔色を変えて食つてかかり、時には取組とくぐみ合いの親子喧嘩をやらかすこともあつた。

それを見ている菊繪は何ンにも云わなかつたが、心ひそかに、兄の味方をしたのは、云うまでもない。

それでいて、ムキになつて兄を罵る父の心が哀れで気の毒でならなかつた。

菊繪がはじめて日記をつけ出したのは、聖華女学院に入学した年からだ。

その年、雪の降る日、二・二六事件が勃発した。

重臣や閣僚が無残にも殺されたが、青年将校たちの計画したクーデターは、結局、不成功に終

音雄は大学の帰り、山王ホテルや幸楽の前まで行つて、現実に機関銃の射合いを見てきたと云つたが、その日はさすがに、父との口誼いをしようとはしなかつた。父も沈痛な面持だつた。二人は、ポツリポツリ、時局について語つていたが、まだ黒白がつかないので、父としても軽々しく叛乱軍を支持するわけにはいかない風であつた。

然し、菊繪が時局とか政治とかについて、それをわが身にひきつけて考えるようになったのは、やつぱり、二・二六事件が、そのキツカケになつている。

「お父さん、こういふ時にこそ、斎藤実さんに書いて貰つたという色紙でも、床の間に飾つたらどうですか」

と、音雄は皮肉に、父をからかつた。

父はそれを命から二番目のように大事にしていたが、その日、それを床の間に飾るためには、いつもと違つた勇氣が必要だつた。

三月、広田内閣が成立したが、その陸相の寺内は、国会で、

「自由主義は共産主義の温床だ」

と叫んで、自由主義弾圧の火の手を上げた。それは新聞紙上に大々的に報道されたので、むろん、菊繪の目にもはいつた。

父は鬼の首を取つたように喜んで、新聞を片手に二階へ上がつてきて、

「音雄に見せてやろうと思つて、持つてきたんだが——」

と云つた。兄はまだ大学の研究室から、帰つてきていなかつた。

「菊繪。お前は兄さんの影響を受けてはならんぞ。音雄のような思想は、今に、この日本では許しておけなくなる。わたしはそれが不憫ふびんで云うのだが、音雄にはわからないらしい。お前は大丈夫だろうな」

と父は、菊繪をたしかめるように云つた。

「お父さま。菊繪はまだ子供よ」

「そうか。それならいい。共產主義が悪いのは云うまでもないが、自由主義さえ、よくないことになつたのだ。世の中は、お父さんの云つてる通りに、段々なつてきたのだ。音雄はそれに抗まもらつているのだ——」

そのとき、父は目に涙さえ、うかべていたのである。

3

菊繪が劇研究会のメンバーにはいつたのは、三年生のときだつた。新入部員に対しては、武中先生の訓示があつた。

武中先生は、子供の時から芝居好きで、二代目市川左團次のやつた自由劇場や、松井須磨子・島村抱月の芸術座の舞台も見ていると云うことだつた。

「劇研究会と云つても、只、芝居ごつこをやると思つちやアダメですよ。むろん、室内劇とか学

校劇とかいうジャンルは、演劇運動にとつては大事な要素には違いないが、やはり系統立つた戯曲の研究、それから演出の研究……舞台機構の研究などが、必要です。然し思想劇とか左翼的な演劇は、学校当局として許可してないのですから、これは十分に注意して下さい。非常時日本は、段々に、演劇統制の道をせまくして行くことでしょうから、各大学の劇研究会なども、特高の目に洗われて、所謂左翼分子は当然、弾圧を受けることになるでしょう。現在聖華女学院には、そうした不穩分子はまだどこにもいないのですが、いつ何ん時、そういうものが忍びこまないと限らない。そうなると、劇研究会などは、まづ先きに睨まれることになる。われわれは、演劇を愛している。只、それだけなのです。そういう同好の士が集つて、課外の勉強をする。そこに重点をおきましょう。くりかえして云いますが、断じて逸脱のないように——」

武中先生は、やや青ざめた頬を、顫わしながら、訓示を終つた。当時先生は三十二、三で、最初の結婚には破れたという噂だつた。

菊繪は武中先生の話を聞いているうちに、胸が一ぱいになつた。

それは兄の音雄のことを思つたからだ。音雄自身は、右でも左でもない中庸の道を行く者だと信じている。

然し、世間が見ると、音雄の行動は、左に傾いていると見るしかないのである。

菊繪の日記には、筆記した武中先生の訓示をそのまま、引き写しておいた。

「断じて逸脱のないように」

先生は力をこめて、そう云うが、然し、新築地劇団や新協劇団の芝居を熱心に見物に出かける

武中先生を見かけた学生は、二人や三人にはとどまらない。

菊繪も兄に連れられて、「吼えろ支那」を見に行つたことがあるが、そのとき、三側か四側前列の椅子に、武中先生のうしろ姿を見出して、ドキンとしたことがある。見つかつては大変と、菊繪はスカーフを頭からまきつけたりした。

だが、菊繪は、そういう叫ぶ芝居に、共鳴は感じられなかつた。自分が舞台で、そういう芝居を演じる気は、さらになかつた。もつと静かな、おちついた、そして詩的な情緒のある一幕物などがしてみたかつた。

千種や三奈子も、

「騒々しい芝居はいやだわ」

と云うほうだつた。

その点で、三人はウマがあつた。千種は、「アルト・ハイデルベルヒ」のケティがやりたいと云い、三奈子はシュニツラーのものを、片つぱしから読んでいた。三人で、オニールの脚本の読合せをしていると、治療衣を着た父が階段の下までやつてきて、

「こら……うるさい」

と歟鳴つた。仕方なしに、三人はめいめいテキストをかかえて、二丁池のほとりまで、逃避しては、そこで発声法の練習もした。

ポートで、池の中央まで出ると、かなり大きい声をはり上げても、岸の人たちの耳には届かないようだつた。